

人類の成長を諦めない神の愛

清川 泰司 神父

主の御復活おめでとうございます。

教皇ヨハネ・パウロ二世が1981年に日本に来日し、広島市の平和公園での『平和スピーチ』の中で「戦争は人間の仕業です。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です。」と語りました。

現在、新型コロナウイルスの影響、また、ロシアのウクライナ侵攻によって、愛する人を失い、生涯、悲しみを背負わなければならない人が生まれています。

人類は歴史上、疫病、天変地異に翻弄され、また自ら戦争を起こし、悲劇も作り出しました。さらに、災いを拙い感情と狭い視点における正義観によって、人間が悲劇を拡大させてきた経験もしているのです。それは、人間は、自己の救い、家族の救い、仲間の救い程度しか求めることが出来ず、いまだに「イエス・キリスト」が伝えた「神の御心」である、全人類の救いを求めることができない致命的現実があるからです。

私は、第二次世界大戦の悲劇を体験した人類が、自らの致命的現実から生まれる残虐性を自覚し、少しは成長したと思っていました。残念なことに、今回も、独裁的為政者が、戦争の引き金を引いてしまいました。人類史上、貧富の差と、人々の富と力への欲求からくるコンプレックス、そして、その不条理からくる怒りと、拙い感情的正義観による暴力的エネルギーにより独裁的為政者[似非救い主=偶像]は、生まれてきました。

現代世界は、経済を土台にITを駆使し合理化を加速させています。随分便利になりました。しかし一方で、合理的に富が一定の人々に集中するシステムを生んでいます。そのシステムの中、低賃金で奴隷のように働き、やるせない思いを持つ人々を生んでいるのも確かです。その思いによって、根拠のない力(偶像)への要求が生まれ、各地で独裁的為政者を生んでいるのです。その為政者は、根拠のない力である国家主義、民族主義、イデオロギー、宗教などを利用します。また、それに魅せられる人々は、自分が属する仲間、また考えと違う者と対立し、排除する傾向があります。そのエネルギーを為政者は、自分の利益と保身の為に利用するのです。

聖書は、人間の富と力への憧れ、その欲求から「偶像神」を作る傾向がある事を明らかにします。つまり、人間が自分の都合の良い神を作り、依存する傾向があることを暴くのです。聖書は、様々な物語を通して、人間が「主なる神」よりも、自己の欲望、願望、野望、保身、感情により様々な「偶像神」を作ることを明らかにします。究極的には、イエ

ス・キリストが「神の御心」を現す言葉と行いによって、人間の心の奥底にある偶像の正体を明らかにするのです。イエスが伝えた「神の御心」は、すべての人は兄弟姉妹であり、いのちの優劣はありません。また、対立ではなく和解を求めるのです。この「神の御心」を基準にすると、「戦争」や「差別」、また「優越感」と「劣等感」が生まれる世界を作るのは、「神の仕業」ではなく、「人間の仕業」ということになるのです。

神は、この人間の平和を作ることのできない致命的現実(罪深さ)を明らかにするために、今から約二千年前、御自分の子「イエス・キリスト」を、この世に派遣しました。そして、その目的は、偶像の正体を明らかにし、本来の人類の成長の道を整えることでした。そのイエスが「神の御心」を伝える方法は、人間の富と力への欲求により作り出された社会の中で、無力で、差別され、尊厳を失った者の側に立ち、人と人を分け隔てる壁を崩し、和解を生むことでした。そして、その和解の仕上げに、自らも、人間にとって無力で役に立たない、邪魔者となり、人間の野望や欲求、正義感の中で、十字架刑により殺され、神からの使命を成し遂げたのです(ヨハネ 19:30)。

この出来事により、人間の力への欲求(知恵・名誉・富・権力・正義)が、神の子をも殺し、弱く、貧しくされた兄弟姉妹を無視し、尊厳を奪い取る、その現実を明らかにしたのです。イエスは十字架上で「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ 23:33~34)と言ったのは、この意味なのです。

その一方で、神は、人間としての致命的現実から来る乏しさを痛感し、「主よ、憐れみたまえ」という者には、御自分との豊かな交わりを作り、その上で、「御国が来ますように、御心が天で行われるように地にも行われますように」と祈る者に、神から与えられた本当の「いのちの意義」(神の協力者)と希望を見出す恵みを与えるのです。

四旬節、聖週間、そして復活祭を通して、私たちは、この神の救いを確認する恵みをいただきました。現代の経済を重視する合理化された世界の中で優越感に浸る者、一方で劣等感に苛まれ自暴自棄から根拠のない力に頼ろうとする者には、「十字架」は無意味であり、無力と感じるでしょう。しかし、人類の歩みの中で「十字架」は、人間の致命的愚かさからの解放のシンボルであり、人間が「神の似姿」(神の協力者)として復活(再創造)するための「永遠の神の愛」のシンボルであることは変わらないのです。

世界の平和の為にお祈りください・・・。

ナポレオン[1769-1821]は、部下の文部大臣に厳粛な顔つきで「フォンターヌ、君は知っているかね、この世界で私をもっとも驚かせるものが何かを、力によっては何も作り出せないということだ。剣は最後には常に精神(イエスの十字架の記憶を想定)によって敗北させられるのだ。」と。